

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 11年4月

～自動車生産は6月にほぼ震災前の水準まで回復する見込み

経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎

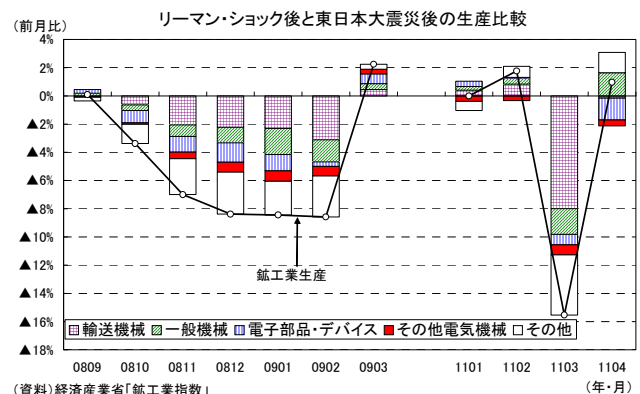
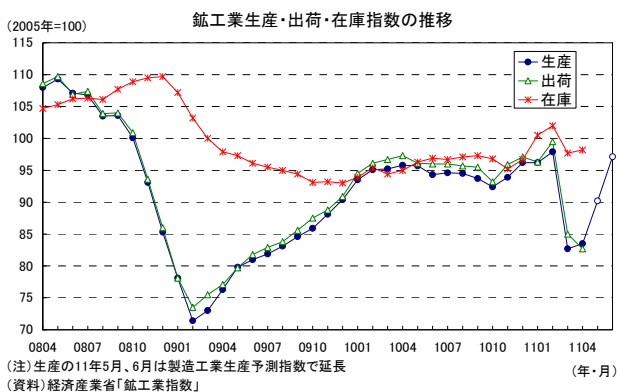
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 震災後の生産の落ち込みは短期間で歯止めがかかる

経済産業省が5月31日に公表した鉱工業指数によると、4月の鉱工業生産指数は前月比1.0%と2ヵ月ぶりに上昇したが、事前の市場予想（共同通信集計：前月比2.2%、当社予想は同3.3%）は下回った。出荷指数は前月比▲2.7%と2ヵ月連続の低下、在庫指数は前月比0.5%と2ヵ月ぶりの上昇となった。

4月の生産を業種別に見ると、情報通信機械（3月：前月比▲8.0%→4月：同▲17.2%）、電子部品・デバイス（3月：前月比▲6.6%→4月：同▲12.7%）は低下幅が拡大し、3月に前月比▲46.7%と過去最大の落ち込みを記録した輸送機械も同▲1.5%と生産水準をさらに切り下げたが、一般機械（3月：前月比▲14.5%→4月：同12.8%）、精密機械（3月：前月比▲12.9%→4月：同24.7%）などが急回復した。速報段階で公表される16業種中、8業種が前月比で上昇、8業種が低下となっており、業種毎に復旧のペースに開きが出ている。

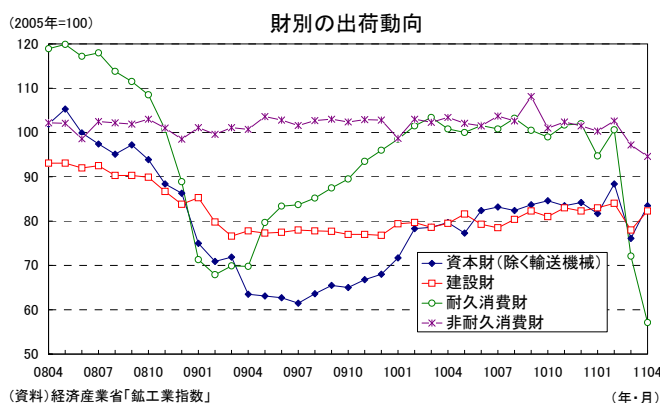
3月の生産は単月では過去最大の落ち込みとなったが、震災に伴う一時的なショックによる部分が大きかった。世界的な需要の急減によって景気の大幅な悪化が続いたリーマン・ショック後とは異なり、生産の急激な落ち込みは短期間で歯止めがかかった。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は1-3月期に前期比▲2.4%と7四半期ぶりにマイナスとなった後、4月は前月比9.7%の急上昇となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は1-3月期に前期比▲0.5%と5四半期ぶりのマイナスとなった後、4月は前月比5.5%となった。毀損した生産設備の復旧に向けた動きを反

映したものと考えられる。

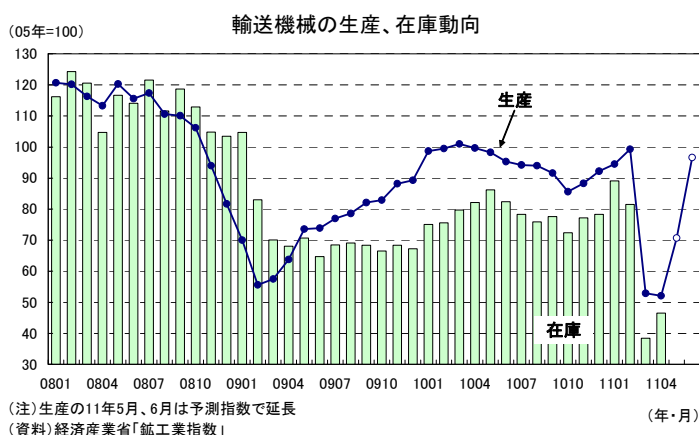
一方、消費財出荷指数は1-3月期に前期比▲7.8%と2四半期連続で低下した後、4月は前月比▲9.1%と大幅に低下した。特に、耐久財の落ち込みが大きかった(耐久財:前月比▲20.8%、非耐久財:同▲2.7%)が、これは工場被災、サプライチェーンの寸断によって自動車の生産、出荷がほとんど停止してしまったことによるものであり、必ずしも個人消費の弱さを反映したものとは言えない。



2. 輸送機械の生産は6月にはほぼ震災前の水準まで回復の見込み

製造工業生産予測指数は、5月が前月比8.0%、6月が同7.7%となった。生産計画の修正状況を示す実現率(4月)、予測修正率(5月)はそれぞれ▲5.4%、▲0.6%であった。

予測指数を業種別に見ると、輸送機械の大幅増産計画(5月:前月比35.7%、6月:同36.7%)が際立っている。4月の輸送機械の生産水準は震災前(2月)の約半分になっているが、5月、6月の2ヵ月で震災前の水準をほぼ回復する計画となっている。輸送機械の生産が予測指数通りとなれば、6月の生産水準は2月の97%となる。問題は今回の生産計画の実現可能性であるが、4月の実績は4/10時点の生産計画から2割以上下方修正された(実現率:▲21.5%)一方、5月の計画はほとんど修正されていない(予測修正率:2.3%)。このことは工場の操業再開は当初の想定よりも遅れたものの、その後の復旧ペースは順調であることを示唆している。



今回の予測調査は震災の発生からほぼ2ヵ月が経過した時点で実施されており(調査票の提出期日は5/10)、前回調査に比べると生産計画の不確実性は低下していると考えられる。予測指数通りの伸びとなるかどうかは別として、5月、6月の輸送機械が大幅増産となることはほぼ確実といえるだろう。

4月の生産指数を5月、6月の予測指数で先延ばしすると、4-6月期の生産は前期比▲2.2%となる。四半期ベースでは4四半期連続で減産となる可能性は高いものの、月次ベースでは5月、6月とV字回復が実現する可能性が高い。ただし、7月以降は電力不足の問題から回復ペースが鈍化することが懸念される。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。